



リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - Ω - ?
（「ぱられる律子」）

（発掘作業中）

霧樹里守 is 土岐真扉

『 朝日ヶ森の朝焼け ～連載第一話～ 』（@中学2年？）

2006年10月11日 [連載（2周目・最終戦争伝説）](#) [コメント（2）](#)

「リツコ。ねえ律子ってば！」

考えにふけていた彼女に督促の声。

律子があわてて相手のさし出すカードを抜き取ろうとして、自分のカードをそでにひっかけてしまった。

バササッ。

手札が全部ひざの上へ落ち、ポーカーフェイスで巧みにかくしておいたババまでが、堂々と顔を並べている。

「ドジ！ まーたやった」

「あはは丸見えだ」

あや～～。律子はいつもの癖で、ツァッ、ともチッ、ともつかない舌打ちをしてカードを拾い集めた。

まったくあの野郎のおかげで今日はろくな事がない。

一枚ひき、一枚ひかせた後、律子は背もたれに重心を移して椅子を後足二本で立つ格好にし、ひざで机につかえ棒をあてて腕をざっくり組んだままぶ然として足をゆらしていた。

数人でババ抜きをやっている最中だったので、一人がふてていれば当然、他の連中の興味を引く。

「どうしたん。めずらしくまともそーに悩んでるじゃん」

真っ先に首を突っ込みたがるのは小野えりゆ。

斜め前から身を乗り出して来るその隣りでは、一級上の宇野洋子がいかにもお人好しげに首をかしげて、心配事ならいつでも相談にのるよという眼をしているし、レイラ・ジュンがばっさりした亜麻色の髪を風になぶらせながら、机にひじをつき、手の甲にあごをつっかけて、例の横眼で律子をながめている。

律子は軽く握ったこぶしで額をコンコン叩きながらしばらくうつむいて考えこんでいたが、もとよりこういった腹にたまる物事を人にぶちまけずにおくのは性に合わない。

「ん～～、実はね」

律子が話すと見て全員がカードを放り出した。

面白い話題がないとなればトランプも百人一首も喜んでやるが、元来ここ朝日ヶ森学園の生徒って連中は、ひたすら話し合うのやなぞかけが大好きで、悪趣味で低俗なうわさ話以外なら、どんな事でも話の種にして2時間3時間話し続けられるのだ。普段は男子も女子もごったになって、それこそ政治論からSF談義、禅問答まがいの人生論まで、それこそずれにずれこむ大討論会になるのもめずらしくないのだが、今日に限ってなぜか教室には女子しか残っていなかった。

律子は二つに結んだ髪の毛の房の先をいじりながら芝居つけたっぷりに間を置いてから、言った。

「実は、このわたしめにラブレターをよこしたバカが一匹おりまして——.....」

「ええ～～っ!？」

全員が全員、一瞬信じられない顔をして問い返したので、律子は面白くもあったがやや頭にも来た。

「なによ。人がせっかく真面目に.....」

「あ、悪い悪い、ちゃんと聞く」

一人がそう言い、みんながガタガタと座りなおした。

「それで？ 相手だれよ」

× × ×

ウラジミール・パブロフは亡命ロシア貴族の血をひくフランス人。13歳。律子に端的に言わせれば「いけすかないキザったらした、うらなり野郎、」で、一年落第しての小等部最上級生。

特待生クラス——俗称『金持牧場』——の生徒であり、例のお茶会の主催者の一人でもあった。

特待生クラスと言うのはその名の示すとうり、世界的な名門私立校朝日ヶ森学園が、苦学生に支給する奨学金を捻出するために開設しているクラスであり、成績順は下位でも寄付金額は上位という人間が多く集まっている。

次号に続く。

(※注： 続いてません★) (-_-;)d"

香山 秋 朝日ヶ森学園中等課2-E
テニス部／ミュージカルクラブ

立川アンナ 朝日ヶ森学園中等課1-F
ミュージカルクラブ／志望サークル：ピアニスト

宇野洋子 朝日ヶ森学園中等課2-A
ミュージカルクラブ副部長

清瀬律子 朝日ヶ森学園中等課2-B／図書委員
バレエ部／ミュージカルクラブ／志望サークル：作家

『パラレルワールド・千一夜』 主人公： 山吹サラ

五月。いち早く夏を告げる太陽の下で、青い風が窓辺の新緑の中を渡って行く。新入部員たちもそろそろすっかり雰囲気慣れ切ってしまう、ここ風間中学の演劇部室——と、言っても、弱小部の事ゆえ裁縫室を間借りしているだけだが——は完全にまんねりムードに立ち返っていた。

部員数は新旧取り混ぜて女ばかり20人位。毎日の練習課題も一応ある事はあるのだが、「お芝居」が面白くて入った連中には体力作りだの発声練習だのは楽しくないらしくて、文化祭の準備に入るまではほとんど出てこない。

10人程の比較的熱心な“常連”のうち、今日は六人が顔を見せていた。

もっとも、ちゃんとジャージに着替えてトレーニングをしたのは、その更に半分である。後はそれが終わった頃にのこのことやって来て、鞆を放り出すなり雑談やら落書きやらを始める。かけ持ちのマン研のコンテを取り出す者もいる。ようするに、ここは彼女らのたまり場なのである。今日は全員そろってトランプを楽しんでいた。

「ハイ、リツコ、順番だよォ」

「リッコ先輩」

律子と呼ばれた少女は、何度か促されてから気がついて、心ここにあらずという態で1枚をポンとめくった。神経衰弱である。

「2〜〜？ 2って何処にあったっけ……」 およそ気が入っていない。

「あ〜〜、これだもの」——いい加減あきれた、と、向い側に座っていた一人が机の脚を勢い良くけた。派手な顔だちの、かなりの美少女だ。

反動で椅子が後脚立ちになりそうになるのを慌てて押えながら、

「面白くないんだったら抜ければいいじゃないの。気分害するったら……」

「ハーミ、それは言い過ぎだよ。リッコさん、今日、どうかしたの？」

「そうですヨ、リッコ先輩。神経衰弱って得意の筈なのに」

「ん〜〜、ちょっと、変わった事があったもんで——」

律子は、困った、という風に頭をかいた。こういう風な事は第三者には余り話すべきではないと彼女は思っている。殊に、ここにいる連中とは必ずしも親しいというわけではなく、毎日同じ部屋で顔を合わせているとは言っても、ハーミなど犬猿の中と言った方が正しい。しかし……
~~——頭の片すみでは“話すべきでない”という警告を聞きながらも、誰にでもいいから全部がちまけて~~
~~七まってグチャグチャになった頭をすっきりさせたいという欲求に押されて、気がつく、と、律子~~
~~はとつとつとその事を話し始めてしまっていた。~~

~~——「つまり、ね。ラブレターをもらったんだ」~~

~~——事の起りはこうだった。今年3年の律子が演劇部に入ったのは2年の半ばからで、彼女はその以~~

~~前から弱小の文芸部にも籍を置いていた。その文芸部に、今年三年生の新入部員が入ったのである。~~

~~一名前は加鳥洋介。律子のクラスへの転入生で、どうやら教室で文芸部の事を話しているのを見て興味を持ったのが入部の動機らしい。~~

誰であろうと、どんな不都合があろうと、とにかくこのグチャグチャした心の中味を洗いざらい打ちあけてすっきりしてしまいたい——……律子は、自分のそんな気持ちが自制心を打ち負かしてしまいそうなのが恐しくなって、いつものように冗談で誤魔化しながら逃げ出した。

（「真弓ィ！ 真弓？！」） （たぶん高校2年）

（「真弓ィ！ 真弓？！」） （たぶん高校2年）

2016年8月17日 [リステラス星圏史略](#) [（創作）](#) [コメント\(1\)](#)

「真弓ィ！ 真弓？！」

...薄暗がりの中で、とき子の声がする。とき子...真弓の母である。

「帰って来てちょうだい。ママが謝ります。どこが悪かったか言ってちょうだい。真弓！」

違う、違う...

律子は喰い入るように、その光景に釘づけにされながら、心の中で叫び続ける。

お義母さん、自分が何をしたのか、お異母姉（ねえ）さんがどんなに傷ついているのか、判っていないくせに、悪い事をしたんだなんて、これっぽ 自分が間違ってたなんて、これっぽっちも思っていないくせに、お義母さん、お母さん！

お願いだから、それ以上口先だけでお義姉さんに謝ったり、しないで。
これ以上、真弓おねえさんを苦しめないで。

おかあさん...

これは夢だ。間違いなく夢なのだった。

事実、リツコの肉体は、あまりに深い叫びと悲しみとの中で、呻く事も、身動きさえかなわずに、学校の寄宿舎のベッドに金縛りにされている。

冷や汗が流れる。体が氷のように冷える。

...にもかかわらず、百数キロは離れている我が家で、今現在進行中であろうでき事が、映像となって真っ直ぐに彼女の脳裏に飛び込んで来るのだった。

「真弓！何が気に喰わないって言うの？ ママに言って。必ず、必ずママが直して上げるから。真弓！」

無茶苦茶に詰めたスーツケースとバッグ。まだ10月だと言うのにコートの前をかき合わせて、痛々しい程に思いつめた表情の真弓が深夜2時を回る暗い道路へと足早やん歩き出して行く。

追いつがる母は見るからに派手な若づくりの着物の前をはだけ、髪をふり乱して、その本性をむき出しにしていた。

...狂母である。

「離してよ！まだ解んないのね？お母さんが直すって、一体、何を直せるって言うの。」

「離して下さらない、まだ解らないって言うの？ お母さんが直すって、一体何を直せるっておっしゃるのよ」

「だ、だから... ママを信用して話してちょうだい。何があったの。一体何があなたをそんなに変えてしま...」

「信じる！！」

一声叫ぶと、真弓はやせた喉をのけぞらせてヒステリックに嘲い始めた。

「素適ね、素適ねママ... 本当にあなたって素適だわ!!」

とき子がそれを聞いて肩をなで降ろす。

「じゃ、じゃ、真弓... ママにわけを話してくれるわね？ 一体どう...」

くわっ、と、真弓の繊細な面（おもて）が阿修羅と化した。

「ふざけないでよ!! あなたの何処が信用に価するって言うの！ わたしはねエ、もう、もう二度とあなたの事をなんか信用するまいと、10年以上も昔から心に決めていたのだから！ それでも... それでも心の中では、信じたい、あなたを愛せるようになりたい、って、いつも願っていた。

でも、もうそれも終りよ!!」

地団太を踏み、こぶしを小刻みにふるわせて、遂に真弓は涙を抑える事ができなくなってしまったのだろう。...一番親しかった妹の律子でさえ、真弓が人前で泣く所など、見た事もないと言うのに。

「あ、...あの男の事なの？ そうね？ そうなのね？」

哀訴するように体を屈めて、真弓を産み育てた母である筈の女が言う。

その小さな顔の眼が恐怖でひきつっていた。まさか、そんな、あの大人し過ぎる程従順な、近所でも評判の自慢の娘。口答えの一つもした事なく、今日まで26年を親の期待を裏切らずに過ごして来た娘。

それが...

~~—身動きもできずその光景を凝視し続ける律子には、そんな困惑し切った瞳を前にも一度だけ見た覚えがあった。養護施設での事だ。慰問の外国人（黄色い髪と色のないような気味の悪い目の）にいきなり理解できぬ言葉で話しかけられた時の精薄の子供が、失禁して火のついたように泣き出す直前に魅せた。~~

「金子さんの事なら謝ります。ママ、そんなにあなたがあの人の事を好きだなんて知らなかったのよ。ママのせいであの人に捨てられたんだと思っているんなら、もう一度、よりを戻してくれるようにって、ママが頼んで来て上げますから」

「.....おうかがいしますけれど、とき子お母さま。」

まったく内に真弓は見かけ上の穏やかさを取り戻していた。

冷たく凍った声で言い放つ。

「あんな男なんかと結婚したら不幸になるのはわたくしだ、って、おっしゃられたのは、確かあなただったのではございません？ 娘の不幸に、折詰と金包みで、自分から手を貸すなどなさってもよろしいのかしらね」

真弓の急変ぶりに、とき子はうろたえる。可哀想に、その小さな世界で育てられた小さな頭には、真弓が言いたい事など理解できようはずもないのに。

「だから、ね、だから。真弓がそんなにあの人と一緒にいたいって言うんなら、ママのお金で大学にやっけて上げてもいいし、パパがいい就職先を紹介してくれますよ。そう... それより。」

どこかちゃんとしたお家の養子になれるようにして上げてもいい。

金子さんがどうしても映画のお仕事を続けたいっていうのなら、東西映画の社長さんの所でもいいじゃないの。ね、真弓。」

「...ね？ ま・ゆ・み。」

他人ごとのように、真弓がつぶやいた。

「これが、わたしの親なのよ、ね？」

と。

そうして、すっかり、いつもの冷静さを取り戻したのだった。

「隼人さんは、ネ、捨て子の私生児でも、施設育ちの娼婦の子でも、自分の力で夜間高校二部の大学まで行って、そうして自分を捨てたお母さまのために、その大学を中退した人よ。

彼のお母さまはね、麻薬中毒で、半ば気が狂ってしまわれたの。お医者さまは見放したけれど彼は必ず治ると信じていた。

~~—わたしは彼を知っているから、彼がそうなる信じているものなら、わたしもやはり信じるわ—~~

だから私も信じるわ。

それは、何も、お母さまが治られるまでは誰とも結婚しない、って隼人さんが言った事とは関係なかったのよ。

わたしはあの人を信じている。だからあの人信じた事ならばわたしもそれを信じる。

...それだけの事よ。

人が誰かを信じる、という事は、そういうものなのだと、わたし思う。

わたしを信じていると、くどい程に言い続けながら、遂に広い世界には出そうともして下さらなかったものね、お母さん。

真弓は脚本家になります。

いつの日かわたしの脚本が上映されるようになったら、どうか見に来て下さい。

もしかしたら、あなたが理解しようと思わなかった娘の心、じっと口をつぐんだ大人しさの陰で何を考えていたのかを、少しでも解ってもらえる日が来るかも知れない。

こんなになっても... それでもあなたは、わたしの親なんですものね。

そうして、あなたの娘であるという事がわたしをここまで追い込んだ原因なのだけれど。

~~―律子が、...あの子が、自分はお母さんの実の娘なのだと言われ、あなたを義母と呼び続ける気持ち。わたし今になってようやく理解できたように思います。―~~

~~―あの子は既に"母親の子供"という呪縛を断ち切って、借り物でも親の押しつけでもない、自分自身の心で世界というものを捕え始めている。母親の子という呪縛を断ち切って。―~~

~~―けれど私の体の申には、はっきりとあなたの狂気が染みついているのですよ。お母さん。―~~

~~―麻薬のように自分を縛り続けていた方に、今、訣別しようというのだ。―~~

~~―律子は、姉の背のオーラの炎が輝くのが、輝線の一つ一つまでがまるで手にとって触れる事ができそう。真弓の背に輝くオーラの光りを、律子は讃嘆の思いで見つめていた。―~~

~~―そして...~~

~~―「きょうなら、お母さん。もうお会いする事もないでしょう。わたしの代わりにと律子と呼び帰そうなどとは思わないで?―あの子は夫きな翼を持って生まれたのだから。―~~

あなたが赤の他人だと言うならわたしはあなたのことを軽蔑して、まるで無視し切って忘れてしまう事さえできるのに。怖いのはわたし自身の中にさえ、既に"あなたそのもの"が入り込み、住みつき染みこんでしまっている事。

その為にわたしは今日に至るまで人を恋する事もできなかった。救い出してくれる友だちもい

なかった。

そんなわたしを初めて愛してくれた人を、愛し合う人と共に暮らしたいという、わたしの唯一の希望を、娘への愛情という名の札束で、あなたは無惨に踏みにじった!!

...お母さん、あなたは、わたしが彼の所へ嫁（ゆ）く為に、家を出るのだと思っているのでしょうか。そうして、どうして邪魔をしてやろうかと、今その事を必死で考えているでしょう。

隠さなくても解ります。わたしはもうずっとあなたの遣り口を見て来ている。あなたの血を引いた娘ですから。

...彼、死にました。一昨日。

テレビでアパートのガス爆発のニュース、やっていたでしょう？

...自殺なの。

今日、遺書が届いて、あなたが彼の所へ行ったのだと。

彼はこのところひどく疲れていたわ。わたしみたいな山の手育ちを愛してくれたばかりに、自分の経済力やお母さまの事、気にして、何度もそんな事はないんだって言ったのに、わたしを幸せにできないかもって、気に病んでいた。

あなたが彼に何を言ったのかは知らない。だけど彼、信じていたのに。お母さまは治るって、仕事もいつかは波に乗るって、いつだって信じて、希望で明るい人だったのに、

...彼、疲れていた。

あなたのために、絶望してしまった。...

これからわたしは、一人だけ助かった枯れのお母さまのお世話をしながら、昼は働いて、夜に脚本の勉強を始めるんです。

どんな手を使おうと二度とこの家には戻りません。

わたしの人生は、あなたのものではないんです、お母さん。」

長い間、本当に長い間。

麻薬のように自分を縛りつけていた力に、今、訣別しようというのだ。

「私と同姓同名で...」（違う） （たぶん高校2年）

「私と同姓同名で...」（違う） （たぶん高校2年）

2016年8月17日 リステラス星圏史略 （創作）

「.....ふう」

律子はベッドにひっくりかえって考えている。作文は仕上がらない。頭の中には別の事が走り回る。彼女...高橋 薫。

律子はそもそも夏休みの宿題には、読書感想文を課題としてもらっているのである。

勝手に創作文...（一応）小説...を書く事に決めてしまったのは、ただただ感想文というものが苦手だからというに過ぎなかった。

それに律子は初め、何のたあいもないメルヘンをこねあげてお茶をにごす心詰もりだったのだ。結局の所、~~点かせぎの為の提出物に過ぎない。~~

しかし、まがりなりにも自分でライフワークと定めた"書く"事である。

普段、口先では調子のよい思いつきばかり喋っている分、律子は"書く"という行為の中にだけは、点取り根性や上っすべりな夢物語などを持ち込みたくなかった。

~~で、夏休みあと2日という段になって四苦八苦するハメに陥ってしまった次第なのだ。~~

書きかけのファンタジーをさっさと没にして、かなりハードな話を描いてみようとは、~~思ったのだ。~~進路の事でこの所、少々混乱している頭の中から多分に説明的な、自分が母親に対して持っているある種の感情をベースに、「かなりハードな短編を1本、ほとんどラスト近くまで書き進めたのである。

ところがそこでまたポシャった。

自分の思っている言いたい事が、うまく表現できていないのに気づいたのだ。

2学期開始まであと3日。再構成して、頑張れば書き上げられる筈ではあった。

「あ、あ、あ、」

あくびとも嘆息ともつかない声を発しながら、七かたなく寝返りを打って律子はまたもや古ぼけたカセットデッキラジカセのスイッチを入れる。

さっきから何回目だろうか？ 数少ない友人の1人から借りてきたテープ申島みゆきの「臨丹十」。

どうもこれが逆効果だったのだ。律子の目的からすれば。

~~—高橋薫...昨年から引き続いて幸運、同じクラスになれた...心の申をリピートして止まない、彼女の歌声を追い払うつもりで、律子は手当たり次第にカセットをかけたのである。それが...ああ—~~

~~—ええい、この阿保ウ—~~

~~—何もみゆきをかける琴はなかったのだ。アバだろうとクラシックだろ—と、いっそガンダムでもヤマトでも良かったものを...何が「合わせ鏡」だ、「ひとり上手」だ、明日の天気はどうだろうとも、みゆきだけは、かけるべきではなかった、この場合—~~

~~—律子がいかに内心でくやしがるうとも、—~~

律子は心の中にリピートしている薫の歌声をひとまず閉め出してしまうつもりで聞き始めたのだが、いかんせん、「合わせ鏡」に「ひとり上手」、「あした天気になれ」とくれば、かえって感情をかき乱す結果になる事くらい、予想していてもいい筈だった。

人間、一度に二つの考え事というのは抱えきれやしないのだから。

(※)

...素晴らしい曲だった。

それだけなら別に問題はない。強い印象を受けた歌がその後しばらく頭の中をかけめぐって

たからといって、何の不思議もあるわけではない。

マドリガル。薫が想いのたけをこめて歌っていた、辛い片恋の歌。

題は知らない。だから、恋歌（マドリガル）。

律子はその歌を聞いたのはいつも偶然からだった。一回は学校の裏山で、一回は彼女のバイト先とは知らずに入った喫茶店の小ステージ。

そして、3度目に聞いた時には、薫は、夜の海岸で一人、砂に文字を書いていた。

薫のほうでは律子をそれ程親しく思っているわけでもないらしく、それとも生来淡泊な性（さが）で友大親友というものを必要としないせいなのか、会話の断片から律子が推測できたのはほんのわずかな事ばかり。それでも時折り見せるほんのわずかな仕草や表情のは七ぼ七から苦七々に気をつけて目を向けていれば、相当に苦しい想い方をしているのだろうと律子には容易にわかるのだった。

人づきあいの下手な... というより性格の固さから他人に好かれにくい律子に比べ、薫はクラスの仲間たちや友人たちは音楽関係のサークルの仲間、誰からも空かれていて人気があるようだ。

(※※)

>しかし、まがりなりにも自分でライフワークと定めた"書く"事である。

えっ (@@ ;) そうだったの律子...??

...だめだw w w w w

途中と末尾の「※」「※※」部分...w w w

いまだに時効になりきれない? 「実話」で、

「個人の特定」が（もしかしたら）可能な、
「固有名詞」が丸ごと入っていて、

へたすりゃ「相手の迷惑になる」のでwww

ひみつ日記いん。にて、永久封印～...wwwww

(ここに一人の律子が居る。) (たぶん高校2年)

(ここに一人の律子が居る。) (たぶん高校2年)

2016年8月17日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)

ここに一人の律子が居る。

官女が現時点で高校二年生。

二学期も終りに近づいて、少女の学校では近々進路志望調査、というものが行なわれる。

受験準備の為のクラス編成に備えて、今から卒業後の身の振り方を決定せねばならないのだ。

申請後の変更は、一切、受けつけられない。

~~一律子には行きたい所は早くから決まっていた。決めたとうしろ言うべきであろうか。二つ年長の自分とは違って優秀な姉を持つ律子にとっては、~~

律子には早くから行きたい所は決まっていた。彼女は小説を書くこと...殊にファンタジーやS・F、きもなくば児童文学といったとりわけ独創性と豊富な...を、プロになれないまでも以前から自分のライフワークと目しており、為に就職職業は刺激を受けて自己を錬磨できる編集・出版関係。

今どきの女子が(しかも彼女程度の能力で)なまはんかな4年制大学の国文あたりをかじってみるよりは、その方面の就職に有利な専門学校をと、夏休みの前から心決めてしていたのである。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
3-Ω-?
(「ぱられる律子」)

<http://p.booklog.jp/book/109108>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109108>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109108>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ